

イギリス民話の笑い話、ノヴェル 及びナーサリーテールに現れる植物

池田 広昭

一般科

Plants that Appear in Jocular Tales, Novelle, and Nursery Tales of British Folktales

Hiroaki IKEDA

Abstract

The purpose of this paper is to present a comprehensive list of plant names, along with their frequencies, which appear in Part A, Volume II of *A Dictionary of British Folktales in the English Language* by Katherine M. Briggs. How these plants are dealt with in the folktales is also described.

Key Words: Plant, Folktale, Britain

1. 序

本稿は Katherine M. Briggs の *A Dictionary of British Folktales in the English Language* の Part A, Volume II (もともと 4 分冊で出版されているものの第二分冊に当たる¹⁾。)に収録されている民話に順に目を通し、そこにどのような植物がどのくらいの回数登場し、文脈の中でどのような扱いを受けているかをまとめたものである。すでに発表済みの同書 Part A, Volume I に対するまとめ²⁾の続編にあたる。

Briggs はその *Dictionary* の中で民話を大きく narratives と legends の 2 つの parts に分け、それぞれの part に volume を 2 つずつあてているが、その最初の volume には narratives のうちの fables and exempla と fairy tales が、2 番目の volume には narratives のうちの jocular tales、novelle、nursery tales が収められている。本稿は Volume II に笑い話、ノヴェル、ナーサリーテールとして分類されて収められている民話に関してまとめたものである。Briggs の *Dictionary* における novelle は

超自然的要素のない fairy tale という位置付けであり、“Naturalistic Fairy Tales”というべきものだ³⁾と Briggs 自身言っている。Fairy tale と同様、物語としての筋 (plot) は明確に備えているが魔法のようなことが起こらない民話である。Nursery tale と呼ばれるものに関しては Briggs 自身のはっきりした定義はないが、この範疇に収められている話を見てみると、次のようなものであることがわかる。すなわち plot を明確に持ち tale として成り立つ rhyme を rhyme の体裁のまま、主として、脚韻形式を備えたままで収録しているものと、やはり plot を明確に持つ rhyme を rhyme 形式ではなく prose 形式に変換して収録したものの 2 種類である。なお、jocular tale は普通の笑い話、滑稽譚である。

2. 植物の種類と頻度

Katherine M. Briggs の *A Dictionary of British Folktales in the English Language: Part A, Volume II: Jocular Tales, Novelle, Nursery Tales* (4 分冊の場合の

第二分冊に当たる)に収録されている民話に現れる植物の種類と登場の頻度、及び扱われ方を、登場の頻度が高い順に、一覧にして以下に示す。

植物名を拾い出すにあたっての規準として以下の事項をもうけている。すなわち名詞以外の品詞も採る。ただし一覧での見出しは名詞形に統一する。(動詞として使われている pepper、形容詞形の rosy もそれぞれ pepper、rose の見出しのもとに入っている。)複合語の一部として含まれている植物名も採る。(gingerbread の ginger、beanstalk の bean 等。)方言形については、それが標準英語の語形の訛ったものである場合は、その方言形を別の見出しとして立てず標準英語の語形のところに入れる。

(Lindsey 方言の esh と Cumbria 方言の turmet はそれぞれ ash、turnip の見出しに入る。)しかし標準語形とかけ離れた方言形は別の見出しとして立てる。(potato の意の方言 spud は spud という見出しとして立てる。)標準語形を短縮したり、ぞんざいに発音したりした語形は標準語形のもとにまとめる。(potato を表す tater、taty、tobacco を意味する baccy、'bacca 等。)固有名詞(人名、地名等)として使われている植物名も、本来の植物の意味合いが生きていると思われるときは採用する。(Pepper、Mustard 等の人名、あだ名の Cap o' Rushes の Rush、Cherry という牛の名等。)植物名には日本語訳を付すが植物学的正確さは意図していない。おおまかな参考程度である。

植物の頻度は合計登場回数ではなく、ある植物がいくつかの民話に現れているかを鍵として整理してある。Briggs の *Dictionary* 中の民話は採録形態(Briggs は form と言っている)が統一されておらず、あるものは出典からの完全な引用、あるものは要約版、あるものは短縮版という体裁である。また要約版と短縮版の区別も明確ではない。さらにはかの形態もある。このように採録形態が一定しない状況ではただ単純にある植物名が合計何回登場するかを規準として頻度をまとめるのは適当ではない。要約版、短縮版が多数混じっているとすれば、当然植物の種類も合計登場回数も、全部完全版だったときに比べて減るのは明らかだからである。特に合計登場回数の減少は著しいであろう。しかしある話にとって重要な植物はたとえ要約版であっても省略されない、逆の見方をすると、要約版に現れる植物はたとえ

たった一回であってもその話にとっては重要なものである(ことが多い)であろうから、ある植物がいくつかの話に登場するかを第一規準に据えて頻度を整理するのがより適当であると考えられる。ただし合計登場回数も参考までに示しておくことにする。

何をもってひとつの話と数えるかについて付言しておくべきことがある。すなわちたとえば Palmer's *Anecdotes and Tales* や *The Parrot Tales* という題の話の場合、それぞれの題名のもとに実は、題材の面から関連はあるが、別個の話が複数収められている。こう言った場合は同じ題名のもとに集められていても別の話であるから、それぞれを一個の独立した話として扱うのが適当である。したがってそのように扱うことにする。

方言の激しい民話には anglicized version が併録されていることがあるが、このような場合は標準英語版を対象として調べている。

植物の民話中での扱われ方については、主題、モチーフ、背景描写、修辭を設けて整理している。主題は植物が話の中心または擬人化して主人公になっている場合、もしくはそれに近い場合を表す。モチーフは民話を分類する際に使う話素のことで、植物が話の展開の上で欠かせない要素である場合、またはこれに準ずる場合を表す。背景描写は主題でもモチーフでもなく背景の描写またはいろいろな説明に現れている場合を表す。修辭は比喻など文の飾りとして植物が用いられる場合を示す。これらの項目にのせている数字はいくつの話にその植物が現れるかを示している。植物がどういう扱いを受けているかに関する判断は重要度の高いほうにやや傾斜したものになっている。言いかえれば、比較的甘くなっている。ひとつの植物に関して、主題、モチーフ、背景描写、修辭という4項目の数値の合計がその植物が登場する話の数より大きい場合があるのは、同じ話のなかでその植物が2つ以上の扱いをうけていることがあるからである。

「ほかの資料」の項目のところには Chaucer、Shakespeare、Mother Goose (イギリスの伝承童謡)³⁾、Briggs の *A Dictionary of British Folktales in the English Language* の Part A, Volume I: Fables and Exempla, Fairy Tales にその植物への言及があるかどうかを示してある。言及がある場合はそれぞれ C, S, M, FI という記号でそのことを示した。

表 1. イギリス民話の寓話・教訓話及びフェアリーテールに現れる植物

植物名	日本語訳	登場する話の数	合計登場回数	主題	モチーフ	背景描写	修辞	ほかの資料
corn	穀物、特に wheat	23	69	0	21	2	0	CSMF1
apple	リンゴ	15	37	0	13	1	1	CSMF1
tea	茶	15	26	0	6	8	1	MF1
grass	イネ科の野草	14	30	0	8	6	0	CSMF1
potato	ジャガイモ	11	18	0	8	3	0	SMF1
oak	オーク	9	12	0	8	1	0	CSMF1
nut	堅果、木の实	7	27	0	4	2	2	CSMF1
pea	エンドウ	7	10	0	4	0	3	(C)SMF1
tobacco	タバコ	7	7	0	3	4	0	MF1
turnip	カブ	7	19	0	7	0	0	SMF1
wheat	コムギ	7	24	0	7	1	0	CSMF1
bean	豆、ソラマメ類	6	10	0	4	1	0	CSMF1
oat	カラスムギ	6	8	0	4	2	0	CSMF1
cabbage	キャベツ	5	14	0	5	0	0	SMF1
malt	麦芽	5	32	0	3	1	0	CSM
pear	ナシ	5	28	0	4	0	1	CSMF1
gooseberry	グースベリー	4	5	0	4	0	0	S F1
flax	アマ	3	5	0	3	0	0	SM
ginger	ショウガ	3	6	0	1	2	0	CSMF1
mustard	カラシ	3	3	0	2	0	0	SM
orange	オレンジ	3	8	0	3	0	0	SMF1
plum	プラム、スモモ	3	8	0	3	0	0	CSMF1
rose	バラ	3	4	0	1	0	2	CSMF1
acorn	ドングリ	2	2	0	2	0	0	CSMF1
ash	トネリコ	2	3	0	1	1	0	CSMF1
aspen	ヤマナラシ	2	5	0	2	0	0	CS
cherry	サクランボ	2	7	0	1	0	1	CSMF1
clover	クローバー	2	2	0	1	1	0	SMF1
elm	ニレ	2	2	0	1	1	0	CS F1
hazel	ハシバミ	2	3	0	2	0	0	CSMF1
heath	ヒース	2	2	0	0	2	0	CS F1

植物名	日本語訳	登場する話の数	合計登場回数	主題	モチーフ	背景描写	修辞	ほかの資料
heather	ヒース	2	2	0	0	2	0	F1
ivy	キヅタ	2	3	0	2	0	0	CSMF1
palm	ヤシ、シュロ	2	3	0	1	1	0	CS
parsnip	パースニップ	2	3	0	1	1	0	S
pepper	コショウ	2	7	0	0	1	0	CSMF1
rush	イグサ	2	26	0	2	0	0	CSMF1
thorn	イバラ	2	2	0	1	1	0	CSMF1
willow	ヤナギ	2	3	0	2	0	0	CS
balm	バルサム	1	1	0	0	1	0	CS
banana	バナナ	1	4	0	1	0	0	
barley	オオムギ	1	1	0	0	1	0	CSMF1
berry	液果、漿果	1	6	0	1	0	0	CSMF1
bramble	blackberry 類の木苺	1	1	0	0	1	0	CSMF1
brier	イバラ	1	2	0	0	1	0	CSMF1
cocoa	ココア	1	4	0	1	0	0	
coffee	コーヒー	1	2	0	0	1	0	M
colewort	アブラナ属の植物	1	2	0	1	0	0	
cork	コルク	1	2	0	1	0	0	SM
crab	リンゴの一種	1	2	0	1	0	0	S
currant	スグリ	1	1	0	0	1	0	SM
damson	ドメスチカスモモ	1	1	0	1	0	0	S
fig	イチジク	1	2	0	1	0	0	CSM
filbert	ハシバミ	1	1	0	0	1	0	S
furze	ハリエニシダ	1	1	0	1	0	0	S F1
gourd	ウリ	1	1	0	0	1	0	S
hemp	アサ、タイマ	1	9	0	1	0	0	CSMF1
hop	ホップ	1	2	0	1	0	0	F1
juniper	ビャクシン	1	1	0	1	0	0	
kale	チリメンキャベツ	1	1	0	0	0	1	MF1
lettuce	レタス	1	1	0	1	0	0	S
lily	ユリ	1	1	0	0	0	1	CSMF1
melon	メロン	1	1	0	0	1	0	M
nettle	イラクサ	1	1	0	1	0	0	CSMF1
nutmeg	ナツメグ	1	2	0	1	0	0	CSM
plummock	小さな plum	1	1	0	1	0	0	
pumpkin	カボチャ	1	3	0	1	0	0	M

植物名	日本語訳	登場する話の数	合計登場回数	主題	モチーフ	背景描写	修辞	ほかの資料
reed	アシ、ヨシ	1	5	0	1	0	0	CS
runner bean	ベニバナインゲン	1	1	0	1	0	0	
rye	ライムギ	1	1	0	1	0	0	CSM
sedge	スゲ	1	1	0	0	1	0	S
sod	turf のこと	1	1	0	1	0	0	
spud	potato の俗語	1	1	0	1	0	0	
thistle	アザミ	1	2	0	1	0	0	CSMF1
turf	シバ	1	1	0	1	0	0	F1
turmeric	ウコン	1	1	0	1	0	0	
vine	ブドウ（の木）	1	1	0	0	1	0	S
walnut	クルミ	1	7	0	1	0	0	CSMF1
withy	（コリ）ヤナギ	1	1	0	0	0	1	
yeast	酵母菌	1	2	0	1	0	0	
yew	イチイ	1	1	0	0	1	0	CS

3. 種類と頻度の傾向

表1の「ほかの資料」の欄を見ればわかるように、Briggsの*A Dictionary of British Folktales in the English Language*のPart A, Volume IIに現れる植物の種類は、Chaucer、Shakespeare、Mother Goose及びBriggsの*Dictionary Part A, Volume I*に登場する植物と共通するものが多い。ことに登場する話の数が2以上の植物についてはこの傾向が著しい。このことはVolume II側から見たときだけでなく5者相互にあてはまることである。したがってChaucerにしるShakespeareにしる、あるいはMother Gooseであれイギリス民話であれ、登場する植物の種類は総じて似ているということが言える⁴⁾。現れる植物の傾向としては、暮らしに密着した植物、すなわち穀物、果物、野菜、香辛料、家畜の飼料、繊維、木材等有用植物と言われるものと、イギリスの家の周辺や野原でよく目にする野草、樹木が大部分を占め、美しさ、可憐さを愛でるべき観賞的植物が少ないということ、海草やきのこ類がほとんど見られないということが挙げ

られる。観賞的植物が少ないということは5者中Volume IIにおいて最も顕著である。同じイギリス民話でもVolume Iではそれほど顕著ではない。このことはVolume Iの大部分を占めるのがフェアリーテールであり、Volume IIのほうでは一番分量が多いのが笑い話であるということと大いに関係がある。笑い話にはフェアリーテールによく似合うロマンチックな観賞的植物が出る幕があまりないからである。

Chaucer以下の5者において、登場する観賞的植物の種類が日本の古典などに比べて少ないということ、したがって季節感が薄いということ、またChaucerとShakespeareのような文学作品でさえも植物を使った文装飾のレパートリーが非常に少ないということ（植物の登場自体がそもそもそれほど多いとは言えない⁵⁾）は特に注目すべき特徴である。ChaucerでもShakespeareでも植物を肯定的に使った文修飾といえばその圧倒的多数はroseを引き合いに出したものであり、それに続くlily、violetを用いたものは数の上からroseに遠く及ばないという状況である。そしてこれら以外の植物をいい意味に使った比喻はさらに少なく、一般的でもない。このよう

に植物をプラスの意味で使ったレトリックのレパトリーは、Chaucer や Shakespeare など意図的に修飾を施している文学作品であっても、あるいは修飾がもっと素朴な伝承童謡 Mother Goose であっても、全般的に決して豊かとは言えない⁶⁾。作為の程度が低い民話ではなおさらである。

Volume II の特徴として注目されるのは、Volume I と同様、lavender、rosemary、mint、chamomile、sage など一群のハーブと言われる薬用香草が出てこないこと、また、Chaucer、Shakespeare、Mother Goose に共通して好ましい花の代表のような扱いを受けている violet が登場しない点である⁷⁾。

Briggs の *Dictionary* Part A, Volume II にしか現れない植物が表中に見られる。すなわち banana、cocoa、colewort、juniper、plummock、runner bean、sod、spud、turmeric、withy、yeast である。このうち banana、cocoa、runner bean、turmeric、yeast は比較的新しい植物名と言ってもよいものであろう。これらの植物の登場は、Briggs の *Dictionary* に収録されている話が Chaucer や Shakespeare はもとより、Mother Goose とくらべても比較的新しく 1900 年代前半に採録されたものが多いということの反映であると見ることができる。Plummock、sod、spud、withy などは方言色、俗語色が強く、民話の特徴が出ていと見られる。残りの colewort、juniper は英国ではなじみ深い植物である。

頻度の面から見ると、Volume II の笑い話、ノヴェル、ナーサリーテールに登場する植物は Chaucer、Shakespeare、Mother Goose、Volume I の寓話・教訓話、フェアリーテールと共通する傾向を示しつつも、これらとはっきり違う性格をも見せている。

共通の傾向としては corn、apple、grass、oak、wheat、pear などの相対的頻度が高い点があげられる。これらは一般にイギリスの文学や書き物あるいは民間伝承によく登場する植物である⁸⁾。

一方、違う傾向としては tea、potato、nut、pea、tobacco、turnip、bean、oat、cabbage の相対的頻度が高いということがあげられる。このことは Volume I にも見られない独自の特徴である。これは Volume II が笑い話を中心とした巻であるということのあらわれである。笑い話の主人公は農民を中心とした一般庶民であること

が多く、話の内容もこういった人たちの日常に関わるいわば下世話なものが多いために、彼らの暮らし振りを映す植物の登場回数が多くなる。したがって彼らが日常接する機会の多い tea、tobacco などの嗜好品や potato、nut、pea、turnip、bean、oat、cabbage などの農作物や食料が笑いの小道具としてたびたび登場することになる。

Volume I とは共通だが Chaucer、Shakespeare、Mother Goose とは大きく違う特徴が Volume II に見られる。それは rose の出現頻度の低さである。ことに Chaucer と Shakespeare で他の植物を圧倒して頻度の高かった rose⁹⁾が Volume II では頻度 3 という目立たない位置に来ている。また rose ほどの圧倒的な頻度ではないものの、Chaucer、Shakespeare、Mother Goose の三者で安定した人気を誇る lily⁹⁾の頻度が低い。これは民話では文の飾り、特に比喩が使われることが非常に少ないということが原因である。Rose、lily とともに女性の美の象徴として三者でたびたび比喩に使用されているが、民話では、たとえ創作物語スタイルのものであっても、比喩の使用頻度自体が非常に低いので、これらが現れる機会が非常に少ないのである。

Briggs の *Dictionary* Part A, Volume II にあらわれる植物の名は全部で 81 種、合計登場回数は 568 回である。合計登場回数は採録されている話の一部が要約版や短縮版であることから考えると参考程度にとどめておくのがよいだろう。Volume I と比較すると Volume II のほうがテキストの分量で 100 ページほど上回るのに種類、登場回数ともに少し少ない。しかし、この数字は Chaucer、Shakespeare、Mother Goose と比較して絶対値は決して大きくはない¹⁰⁾が、植物名のテキスト中に分布している密度は、要約版や短縮版が多数含まれているのにもかかわらず、Volume II の民話のほうがそれらより濃密である。ただし Volume I くらべると Volume II のほうがページ数が 100 ページほど多いうえに合計登場回数が少ない分だけ密度が小さくなっている。それでもテキスト中の植物の分布密度は（数値化することはできないが）Chaucer や Shakespeare より濃いと思われる。さらに民話は巻全体を通じて植物の分布状況が均一である¹¹⁾。Chaucer や Shakespeare で分布が均一でないのはレトリックとして集中的に植物（あるいは動物）を登場させることが多いからである。民話集は比較的短い話が

多数あつまられている形態なのでばらつきやすい。

4. 文脈における植物の扱われ方

Briggs の *Dictionary Part A, Volume II* の笑い話、ノヴェル、ナーサリーテールでは植物が主人公または主題になっている話はひとつもない。この点 *Volume I* の寓話・教訓話、フェアリーテールと大きく異なっている。その一番の理由は *Volume I* と *Volume II* の採録民話の種類の違いである。*Volume I* はフェアリーテールが中心で、*Volume II* のほうは笑い話が半分以上を占めている。そして *Volume II* で笑い話の次に多いのはノヴェルであるが、これはフェアリーテールから魔法的要素を取り除いたともいうべき話である。フェアリーテールでは様々な植物が魔法の力を示し、主人公になったり主題になったりするが、笑い話とノヴェルでは定義上超自然的要素が大方除外されているので植物が主人公になることはまずありえないし（植物が主人公ということは、すなわち超自然的現象である）、主題にもなりにくいようである。主人公を脇から支える形かそれ以下の重要度で現われることになる。

以下植物に対してイギリス独特のとらえ方、感じ方が伺えるようなものを中心にみてみることにする。

Aspen の葉が生まれつきことばが話せない人を治す力をもつものとして扱われている。妻が生まれつき口がきけないことを悲しんでいる夫にある人が aspen の葉をとって夜妻が寝るとき舌の下に入れておけば翌朝は話せるようになると助言する。そのとおりにしたところ、翌朝妻が早速憎まれ口をきくようになった。それで夫は助言をしてくれた人のところに行って、妻があんまりしゃべらなくなるような方法を教えてくれとたのんだ。しかしその男は私には女をしゃべらせるようにする力はあるが、しゃべらせないようにする力はないと断られる。(The Dumb Wife) 植物に魔法の力があるが、結末のためか笑い話の中に入っている。

白バラが chastity index（貞操指標）として The Wright's Chaste Wife という話に登場する。大工職人が世に評判の娘と結婚するが、この娘には父親がなく、母親は持参金の代わりに娘が貞操を守っている限りはしおれないが、失ったときにはしおれるという白バラの花輪

を持たせてよこす。夫は妻の貞節を試してみたくなり落し戸を仕込んだ部屋のある堅固な石の塔を作る。その後夫は町の貴族から仕事の依頼があり、2、3ヶ月家を離れることになる。貴族は職人と話をしているとき帽子の白バラの花輪に気づいてそのいわれを知り真偽を試してみたくなり、こっそり職人の妻のところに行って取り入ろうとする。しかし妻の貞操は固く貴族は金を巻き上げられたうえに落し戸から地下室に落ちて職人が戻るまでの間そこに閉じ込められてしまう。おまけに食事は flax を紡がなければもらうことができない。主人が戻らないので心配した執事が職人に安否を尋ねた際に、やはり白バラに気づき、これも主人と同じく試してみようという気を起こして、同じ目に会う。次に同様に教区の代議員も同じ羽目に陥る。3人は閉じ込められたままで仕事をさせられつづけるが職人が戻り解放される。妻が巻き上げたお金は取っておいてもよいことになり、その後も妻は貞淑でありつづけた。この話は fairy tale に近い内容で、事実これと似た fairy tale もあるが、結局白バラの超自然的力が示される機会がなかったのと滑稽な要素が強いためか、笑い話に分類されている。

ほかに魔法的要素のある植物として willow が The Basketmaker's Donkey に見えている。籠職人がお気に入りのロバがあまり落ち着きがなくてうるさいので短気を起こして、しない鞭でロバを打ったところ真っ二つに裂けた。職人はこの事を大いに悔やみ柳の細枝で裂けたロバをしっかりと縛りつけ、継ぎ目を粘土で埋めた。そしてたらロバが生き返ったばかりか縛るのに使った柳も伸び続け籠の材料に事欠かなくなった。ほら話の一種であるが明らかに超自然的力が柳に認められる。

話の筋にとってはあまり重要でない文脈ではあるが、昂ぶった神経を静めるために parsnip wine を飲ませる場面が Three in One に見られる。Parsnip で wine を作るということが一般的なことかどうか、また鎮静作用が本当にあるのかどうかはつまびらかにしない。

これも Three in One であるが、新しい墓から掘り出した最後の土を月の出の前にとって yew の葉といっしょに湿布を作れば膿の出る傷に効くとする箇所がある。

お化け野菜についてのほら話がいくつかある。聖マルティヌスの日（11月11日）に牛がお化けカブを食べ始め、カブの中にトンネルを掘る形で食い進み、クリスマス

スが過ぎてからやっと出てきたときにはまるまる太っていたという。(The Great Turnips) これとよく似た話が Jack and the King or You're a Liar にも見られる。またこの同じ話には beanstalk が天まで届くほど高く伸び、それを何日もかけて上って行くという嘘も登場する。Turnip にはほかに、10 エーカーの畑に大きなカブを3つ育て、そのうちの1つが大きくなってほかのカブを押し出してしまったというような話もある。(The Three Turnips) 似たような話が、数は違うが cabbage にもある。(A Giant Cabbage) The Cole-wort という話ではある晴れた日にお化け colewort の陰で 80 人もの鍔掛け屋がいっしょに座って仕事をしたというほらを吹く場面がある。巨大野菜のほら話はほかに、上のものほど荒唐無稽ではないけれど、Giant Parsnips の parsnip や Mark Twains in the Fens の potato などがある。

Cherry を雌牛の名前にしている(The Old Man Who Lived in a Wood)のは、日本では考えにくく興味深い。Volume II には見られないが daisy という名を雌牛に付けることもあるようである。日本では牛に「きく、さくらんぼ」などと花や果物の名を付けることは、たまに聞くとはいえ、あまり一般的とは言えないであろう。

Nuts の登場回数が多くなっているがこれは nuts をモチーフにした同類の話がいくつかあるからである。死んだ人と一緒に埋めた木の実を盗もうとするものと羊を盗もうとするものが教会の墓地で出会って、互いの意図を知らせ、それぞれ首尾よくいったらまた落ち合おうということにして仕事をしに行く。先に木の実を盗りに行ったほうが仕事を済ませて、盗った木の実を鳴らしながらもう一方を待っている。これを後から来たものが幽霊、もしくは悪霊と勘違いして、寺男も巻き込むどたばた劇に発展する。(The Bag of Nuts: I and II はほか同趣旨の話がいくつかある。) 木の実を鳴らす音が幽霊を連想させるという点が注目される。

ニワトリの頭に、acorn、gooseberry、pea、corn など(このうちのどれかひとつ。話によってどれか違う。)が落ちたのを空が降ってくると勘違いして、会う動物会う動物にそのことを警告し皆一緒に進んで行くという、記憶を試すナーサリーテールがある。(Chicken-licken, Chickie Birdie, The Hen and her Fellow-travellers, Henny-penny 等)

笑い話、ノヴェル、ナーサリーテールに現われる植物にはフェアリーテールの植物のようにめざましい力や働きをするものが少なく概して地味で色彩感に欠ける傾向がある。

5. 結 語

本稿をもって Katherine M. Briggs の *A Dictionary of British Folktales in the English Language Part A: Narratives* に現れる植物の調査をすべて終えたことになる。まだ Part B: Legends が手付かずで残っているが、一応 narratives だけは全部調べ終えたことになる。それにより、いままでイギリスの古典文学作品や伝承童謡の植物を調べてわかっていった傾向が改めて確認され、より一層明確化したといえることができる。しかしその一方で新たにはっきり見えてきたことがある。それは民話での rose の扱われ方が他の沢山の植物とたいして変わらず、頻度も比較的低かったということから、Chaucer と Shakespeare で植物の中で圧倒的に rose の登場回数が多いのは文学作品としてのひとつの特徴なのであって、必ずしもイギリス人、特に庶民全体に共通の伝統的関心を強く反映したものではないかも知れないと言えそうだという点である。どうやら Chaucer と Shakespeare で rose の登場回数が非常に多いのは二作家独特の共通の詩的、文学的センスの表れと見るほうが真実に近いようである。イギリスで伝統的に rose がもてはやされるのは確かだとしても、それは全体として見れば、Chaucer と Shakespeare における突出した頻度に比例するほど著しいものではないということが民話での rose の扱われ方に示されていると感ぜられる。

頻度の面で rose に遠く及ばないが lily と violet も rose に似た点がある。この2つは Chaucer と Shakespeare で比喻としての使用頻度が割合高いのに民話では lily はほんの少しだけしか現れず、violet はまったく登場しない。これにより rose とこれら2つはもっぱら文を飾るための文学的小道具、もしくは専用語的色彩が濃いということがはっきりする。

Chaucer の daisy の多用(全部で14回。他と比較して多いと言える。)が個人的好みの反映であるということもより一層信憑性を増す。Shakespeare でも Mother

Goose でも、また民話でも daisy はほんの数回しか現れないからである。

伝承童謡というものは民話と文学作品の両方の性格をあわせもつものであるが、植物の扱われ方から見ると、Chaucer と Shakespeare ほどではないものの少し文学よりの性格が強いと言えそうである。これも Briggs の *Dictionary* の narratives を調べた結果感じられることである。伝承童謡では rose の頻度が植物中第一位ではないもののそれなりに高いこと、また lily も violet も比喻として Chaucer や Shakespeare と同じような使われ方をされていて扱いが民話ほどそつけないといったことが見られるからである。

註

- 1) 本稿ではペーパーバック版を用いている。
- 2) 池田広昭「イギリス民話の寓話・教訓話及びフェアリーテールに現れる植物」(『神奈川工科大学研究報告』A-22、平成10年)参照。
- 3) Mother Goose の範囲は Miyakawa, Yoshihisa and Shigehiko Toyama. *A Handbook of Nursery Rhymes*. (Tokyo: Kenkyusha, 1985) と Opie, Iona and Peter. *The Oxford Nursery Rhyme Book*. (Oxford et al.: Oxford University Press, 1985) に記載されている頃である。
- 4) 池田広昭「英国で伝統的に関心を持たれている植物—Mother Goose と Shakespeare の比較—」(『神奈川工科大学研究報告』A-17、平成5年)、同「Chaucer の言及している動植物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-21、平成9年)、同「イギリス民話の寓話・教訓話及びフェアリーテールに現れる植物」(『神奈川工科大学研究報告』A-22、平成10年)等参照。
- 5) Shakespeare の作品などでは植物の登場がいかにも多いような印象があるが、それはそういう部分を特に拾い出だして大きく取り上げることが多いからである。全作品を通じてみると決して植物の登場が多いとは言えない。池田広昭「Shakespeare の言及している動植物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-16、平成4年)、同「Shakespeare の言及している植物名の作品別分布」(『神奈川工科大学研究報告』A-18、平成6年)、同「英国で伝統的に関心を持たれている植物—Mother Goose と Shakespeare の比較—」(『神奈川工科大学研究報告』A-17、平成5年)、同「Chaucer の言及している動植物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-21、平成9年)参照。
- 6) 上記註5)であげた4編の池田の研究報告及び池田「The Canterbury Talesに見られる季節関連の表現と季節観」(『神奈川工科大学研究報告』A-20、平成8年)を参照。
- 7) 池田「イギリス民話の寓話・教訓話及びフェアリーテールに現れる植物」(『神奈川工科大学研究報告』A-22、平成10年)参照。
- 8) 上記註5)であげた4編の池田の研究報告及び池田「イギリス民話の寓話・教訓話及びフェアリーテールに現れる植物」(『神奈川工科大学研究報告』A-22、平成10年)参照。
- 9) 池田「Shakespeare の言及している動植物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-16、平成4年)、同「英国で伝統的に関心を持たれている植物—Mother Goose と Shakespeare の比較—」(『神奈川工科大学研究報告』A-17、平成5年)、同「Chaucer の言及している動植物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-21、平成9年)参照。
- 10) 池田「マザー・グースの中の植物」(『幾徳工業大学研究報告』A-11、昭和62年)、同「Shakespeare の言及している動植物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-16、平成4年)、同「英国で伝統的に関心を持たれている植物—Mother Goose と Shakespeare の比較—」(『神奈川工科大学研究報告』A-17、平成5年)、同「Chaucer の言及している動植物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-21、平成9年)参照。
- 11) 池田「Shakespeare の言及している植物名の作品別分布」(『神奈川工科大学研究報告』A-18、平成6年)、同「Chaucer の言及している動植物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-21、平成9年)参照。

参考文献

- Briggs, Katherine M. *A Dictionary of British Folktales in the English Language* Parts A and B. London: Paperback by Routledge, 1991.
- The Oxford English Dictionary* 2nd ed. on CD-ROM Version 1.13. Oxford: Oxford University Press, 1994.
- Wright, Joseph ed. *The English Dialect Dictionary* Oxford University Press, First published 1905, Third impression 1986.
- 加藤憲市著『英米文学植物民俗誌』富山房、昭和54年。
- 加藤さだ著『英文学植物考』名古屋大学出版会、1985年。
- P・ミルワード著『イギリス風物誌』(スタンダード英語講座11)大修館書店、1985年。
- 成田成寿編集『英語歳時記普及版』研究社出版、1983年。
- 安東伸介、小池 滋、出口保夫、船戸英夫編『イギリスの生活と文化事典』研究社、1986年。
- 池田広昭「マザー・グースの中の植物」(『幾徳工業大学研究報告』A-11、昭和62年)。
- 「マザー・グースに現れる動物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-13、平成元年)。
- 「Shakespeare の言及している動植物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-16、平成4年)。
- 「Shakespeare の言及している植物名の作品別分布」(『神奈川工科大学研究報告』A-18、平成6年)。
- 「英国で伝統的に関心を持たれている植物—Mother Goose と Shakespeare の比較—」(『神奈川工科大学研究報告』A-17、平成5年)。
- 「*The Canterbury Tales* に見られる季節関連の表現と季節観」(『神奈川工科大学研究報告』A-20、平成8年)。
- 「Chaucer の言及している動植物名」(『神奈川工科大学研究報告』A-21、平成9年)。
- 「イギリス民話の寓話・教訓話及びフェアリーテールに現れる植物」(『神奈川工科大学研究報告』A-22、平成10年)。